
メアリー = ポピンズは、何処にいる

asaghi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メアリー＝ポピンズは、何処にいる

【Nコード】

N1903M

【作者名】

asaghi

【あらすじ】

未来。架空の国。都市部近い“市街地”＝シティにおいて、人間が一人、行方不明になった。ルウとラエラが“司令官”より下された任務は、その探索行であった。

命令がいよいよ下った時、あたしは、『いける。』と、思った。
ラエラも、軽く口笛を吹いた。あたしの傍らで。

これなら、軽い、いや、ちよろい、と思っただのかも知れない。
彼女は、普段から、慎重派なのだが。

あたし達だけが例外ではないと思うのだが、与えられる任務と命令に必要なものの幾つかの内、共通したものが一つある。

それは、情報。正確かつ精密なまでの。

伝達方法は、口頭か文書、或いは、その『両方』。

任務なんて、グラタンを焼くように、他愛無い。ただ、ちよつと幾つか、忘れてはいけない事が有るだけ。粉チーズとか、パセリとか。当然、タバスコも（二、三滴は、普通よね）。

ホワイト・ソースに対する、ミルクの割合とか。あたしの知り合いに、乳製品だけは、こだわりの持っているのがいて、それだけは高級食材を扱う店“クロージーヌ”で仕入れてくるのがある。

ああいう店が、安くなんてしてくれる訳無いのに、馬鹿みたいだ。しかも、バターを買う時に限って、知っているの（いつも本人が行く雑貨品店主も含めて）が通りの向こうからやって来た時に、すぐさま、建物の陰に隠れる、鬼ごっこやかくれんぼをするなんて、度し難い。

参政の権限が有り、選挙権も有る、立派な大人のやる事とは、とても、思えない。

そう、任務なんて、軽い。ただ、ちよつと、具の取り合わせも含めて、全体的に塩加減に気を付ければ良いだけ。

あと、オーブンの予熱と温度とか。グラタン皿に、素手で触らな

いように、とか。

………嘘だ。

あたしは、任務の出動命令が下った後はいつも、食欲を失くす。ラエラだって、そうだ。あれほど、冗談好きなのに、その唇からは、一切の微笑が消えてしまう。

ラエラは、金髪のゆるいカーブの長い髪がとても、印象的。今は、前髪も一緒に、頭頂部分で細いピンで留めて、後ろに流している髪型にしている。それだけに、秀でたピンク色の額が、一層艶やかに見える。その上、緑がかった水色の瞳を持って、ギリシャ彫刻が歩いているような長身の持ち主。

あたしですら、日差しの中に、書庫をバックに彼女が佇んでいるのを見れば、良く、はつとさせられる。ここは、ひよつとして、美術館の内部ではないのか、って。

その、彼女の唇から、微笑が消える。空から太陽が消えたように、いえ、厚い雲に隠れたような気がする。

あたしがラエラの信奉者だと思う人もいるかも知れないけれど、あたし達は小さな頃はよく、ドーナツを、オニオン・リングに取り替えてもらう仕事に従事していたものだ。

厨房の人には黙って。

いまだに、その内の何回かは、確実にばれていない、あたし達の仕業だとは、と思う。“学校”でも“寮”でも、良く有る悪戯だったし。ドーナツは、一杯あるのだ。オニオン・リングも。

“学校”では、概して優等生（複数形）だったし。

どんなに美人になって、一見、天使か女神のような外見になっても、あたしは、彼女の事を良く知っている。あたしのチキン・ステーキに、よそ見している隙に、シナモン・シュガーを振りかけたのだ。ホワイト・ペパーにしてくれば、良かったのに。

『あーら。ルウ。それ、食べられるの？変わったご趣味ね。』

だって。思い切り、顔を引っ掻いてやったものだ。悲鳴を上げて、

小悪魔ラエラは逃げ惑った。痛快。

その夜は舎監からの説教の後、二時間のお祈り。その後、（これだけは、周りにも厨房にも申し訳ないと思った。）二人だけで、夕食の時間のやり直し。チキン・ステーキは…味付けし直してあった。その晩は、二人とも、反省室に入れられたけれど、原因は彼女だ。ラエラが悪い。

本人はあたしが、“奉仕の時間”に、草むしりをしている自分を尻目に、礼拝堂の破風の真横、ステンド・グラスが日に照り映えている様を見て、ボーっとしているからだ、なんて、反省室の中で、ぐずぐず、言っていたけれど、あたしの意見は違う。

あの日の“奉仕の時間”は明らかに、礼拝堂の掃除をやるべきだったのに、責任者の尼僧が一人、急な出張で、鍵を持って行ってしまったのだ。予定表まで作っていたあたしは、肩透かしを食らった格好になった。どうしてくれる。

とにかく。あたしは、長い事、ラエラに付き合ってきた。それこそ、近くの普通高校の生徒二人とのダブル・デート（コース？映画と喫茶店、ダンス・ハウスで踊りと食事。はい、おしまい、よ。楽しかったわ。男の子達は、当然のように、『奢るよ。』を連発したし。…あたし達が、その全てに、『YES。』と言ったと思わないでね。学生同士だもの。フェアに行きたいわ。）もね。言いだしつぱは、大抵彼女だ。お陰で、砂糖を入れないコーヒーの味も覚えた（大人ぶりたい年頃だったのよ。未だにコーヒーゼリーは、あたしの好物だったら。）。

そのあたしが言うのだ。ラエラから微笑が消える。その日は、一日が、曇り、曇天なのだ。

もつとも、任務の性質から考えて、やたら晴れまくった青空の下よりは、何だか上手く行きそうな気がする。緊張感も何が無し、持續してくれているみたいだし。コンセンレーション。集中して当

たらなきゃ。やっぱり、ラエラは役に立つ。

そして。あたしも。

その日は朝から、“基地”内が騒がしかった。

私用ブロックに所属する、個人使用エリアのあたし専用の寝室で、当然の権利として睡眠時間を貪っていたあたしの夢の中にすら、言葉話を話す、絢爛豪華な羽と声を持った小鳥達の会話が入って来た。

曰く、

『つぱり、心配だ。』

『待つて。あたしも、行く。』

『予定は、今日なのよ……う、……えても。だから……。』

『すでに、われわれだけの……だいいは……のか……。？』

緑色の服を着た、メッセンジャーがいて欲しい。夢の中であれ、切実に思うのは、こんな時。

背中に羽根を生やして、軽快に基地の廊下を飛び回り、情報を素早く収集し、その後、（特にさし許す故によつて）この部屋に来て、携帯用のホワイト・ボードに5W1H（What何が、Where何処で、Whenいつ、Who誰が、Why何故、How如何にして）を箇条書きに書いて、あたしに説明してよ。何が起こったのか。或いは。

起こらなかったのか。

根が短気で小心なせいとか、こう言う思わせぶりな“夢”が、一番困る。

ぐずぐず、寝返りを打つ、と、朝の光がカーテンの隙間から差し込む、丁度其処に、頭が乗った格好になるらしい。枕の上で、今日の天気を読む。まっさらの上天気。

シスター・ディスカスが、喜ばれるなあ。あの方、洗濯と、ガーデニングが大好きだから。

金髪に蒼い瞳のまだ、『尼さん』と呼ぶよりは、『お嬢さん』と

呼びたい、小柄でほっそりしたシスターの笑顔を思い浮かべながら、もう一回、寝返り。

“基地”を作った時には、責任者は思いもしなかったろうなあ。小鳥（本物、因みに複数種類）の声に起こされる朝なんて。

結果的には、人里離れた所に建設したせいで、緑豊かな、ガーデナー志望者もそうでない人も、日々草むしりと、名前も知らない雑草や昆虫の侵入に悩まされる毎日が遣つて来た訳だが。

あたし的にはOK。野茨にハニー・サツクルの繁み。大歓迎よ。ハーブ・ガーデンだって、嫌いじゃないの。レモン・バームやカモミールの豊かな匂いしたら。くんくん。

と。いきなり、目の前が、ハーバル・グリーンを通り越して、デイブ・グリーンに輝いた。いや、点滅した。それも、クリーム・イエローと代わる代わるに。

悪趣味。と言うか、これで、あたしの視界を乗っ取った積りだから。

本人、PK脳波の軌線をトレースされないように、上手く、マトリクスをごまかした積りだろうけれど、そうはいかない。こんなこと、この、ルウ様に、敢行して下されるのは、どちらの王女様だったんだ。

直接、目を閉じたまま、相手にアクセスする。ついでに、何かシヨッキングな画像を、本人の脳皮質にまでとっくり焼き付くようにしてやろうかと、思ったんだけれど。

考えて見れば、それも大人気ない。最高の、このあたしの、エルドリス・エルゼリ・グレースンの笑顔を持って、歓待せんと、欲す。うむ、^{うま}美しや。

？あのね、ハーブ・ガーデンの収穫が、いつ、あんた中心になったのよ。シスター達じゃなくて。何、周り中笑顔の、この画像。あんなに笑顔で、ラベンダーを折っているけれど。？

心なし、ぶすつとした、我が幼馴染の顔が、前頭葉近くに閃く様に、開いた。それは、何と言ったらいいのか、脳に直接届けられた、動画画像に他ならない。

同時に、これは、本人の個性そのもの、とでも言うのか、“こえ 聲”が、届けられる。“力”の程度によっては、肉声と丸つきり、変わらないので、何度注意しても、遠隔地同士の会話になれない人間は、其処にもしない人間と話すような動作を、繰り返し続ける。・・・非常に、危険である。

とにかく、あたしも、ラエラが、寝ぼけがどうたらと言う前に、とにかく、返事はする。

？何よ、ラファエラ。朝早いじゃない。さては、ふられたな。？
？はっ！パターン。本気ほんつきでワン・パターンね。あんたって、子供の頃より、それしか、思いつかないの？

？眠いのよ。この美しかるべき朝に、あんたに、叩き起こされたくないの？

『ないの。』の『の』の部分に、目一杯、力を込めて、“発音”する。

《叩き起こす》理由が有れば、別である。それは、二人とも、解っているのよね。

まじめに、この“聲”は、朝の醒め切らぬ脳に、突き刺さるような気がする、ヴィヴィッドと言うか、リアル、とでも言うのか。静画像、いや、写真画像か？に、レタッチ・ソフトでシャープの効果をかけた感じ、とでも言おうか。

？どうしたのよ？？

あたしは、訊いた。今度は、真面目に。

それに答えて、圧縮して、ラファエラがあたしに直接送った情報

は、寝返りをしながら、あたしが得て、そして、当たって欲しくなかった方の予想の、リピートに他ならなかった。

？と言う訳で、多分、“あたし達”の誰かに“お呼び（コーリング）”がかかるから、一応、起きてよ。ルウ。？

あたしは、溜息を付いた。“義務”の無い、平和など有り得ない。それは、解っている積りだった。

？今度は、ヴァネッサとヤヌーシュね。きっと、そうよ。？

？かもね。？

どうでもよさそうに、ラエラの“聲”が応えた。

予測は、外れるために、有るってか？あーあ。

しかも、当たって欲しくない“予感”と言う奴は当たるし。

こうなれば、予知レベルかもね。真面目な話。

/ t o b e c o n t i n u e d

〔状況と活動〕 〈 Status and Activities 〉

【通報が遅れたのは、誰のせいだか言って欲しいんだけど？】
と、あたし。

さほど、早くも無い、しかし、遅すぎもしない歩調で歩きながら、
大体事情は解った所で、こりゃあ、愚痴も出るわ。

【第一斑が、とりあえず、自分達で何とかしようって、頑張っちゃ
った、結果らしいよ。】

あたしの直ぐ傍らを、似たような歩調で歩きながら、ラエラ。
長い廊下。差し込む朝の日差しまでが、事務的で、知性的で、空
々しい。

【頑張らないで欲しかったような気がする。】

行きがかり上、遠慮がちな感想を洩らす、あたしの“聲”を、ラ
エラはどう受け取ったのか、

【最終的な帰還は、夜明け前らしい。第一斑の。】

【最終的な結論も、その時間帯、と言う訳だ。】

解っているけれど、あたしが眠っている時に、そんな大事件が、
起こっていたなんて。

愚痴と溜息は、既にこの唇からは、出尽くした。今は、ただ、黙
って歩くだけ、と。

良く似たデザイン（全体的に、個人の趣味は尊重する気風で、本
当に良かった。）の暗色のレザー・コートが、床の上に翻る。

公式の用件をなすべき場所なのが解る様に、大抵、このエリアは、
革靴の人間が歩く。ついでに、今のあたし達は、ロング・ブーツだ。

リノリウムの床の筈なのに、憎つたらしい。

いくら、蹴り倒しても、中々思い通りの音量と効果にならない。

【やめてよ。】

喋り言葉とそう変わらないイントネーションで、ラエラが言った。

うんざりした口調で。

【床が、悲鳴を上げたら、あんたのせいだから、ルウ。】
う。妙に的確な皮肉を言うようになったわね。ラエラ。

【おいおい。】

【まじかよ。】

【ルウとラエラだぜ。】

【それほどの、事態だって言うの？】

【それほどの、事態なのでしょうね。】

幾つもの似たようなドアが並ぶ、廊下の両側から、洩れて来る、響いて来る、聲、聲、聲。囁き交わす本人達は、壁の向こうであり、それぞれ、個別の部屋に待機している。とは言え、森の中を歩いているみたい。小鳥の声や野獣の唸りに取り囲まれて。と思いきや。

【お早うさん。ルウ。ラエラ。】

【大変だな。】

この状況下で、親しげに話しかけて来る、剛の者もいたりする。疎かにする訳には行かない。

中には、朝、ラエラがあたしにしたように、最新の情報を届けてくれる者もいるからだ。

【決めるのは、“司令官”だろう？誰を派遣するか決めるのはさ。】

【あと、“委員会”とかね。】

同じ基地内でもこの辺の“力”のレベルは高く、殊更に透視能力^{アシス}を駆使し様としなくても、どのコンビだか、或いはチームだか見なくても、分かる連中が揃っている。

【当然でしょう？あたしにだって出来る。】

と、ラエラ。あたしの名前を挙げるのを忘れているぞ。

“基地司令官”の部屋は、“基地”敷地内の、奥まった場所にある。

特に、理由は無いかも。そうでもないかも。

あたし達〃あたしとラエラは、（結局）呼び出しを受けて、仏頂面（だと思っ）の司令官と対面するべく、“執務”エリアの、この廊下を歩いている。現在A M 7 : 3 0。

ベッドから起きて、二十分と経っていない。

我ながら、朝に強くなったものだ。

【司令官の前で、欠伸しないでよ？】

じろり。切れ長の目が、あたしを見遣る。

何をやっても美しいと思っているのは、あんただけよ。とは、おくびにも出さず。

【細かいわねえ。司令官に、其処まで、こだわっているのは・・・。】

【不機嫌をあたしに、移さないで。】

ぴしゃり。バケツ一杯の水のように、あたしの目を覚まさせて、下さいましたわよ。この相棒様は。

【うん。解ったわよ。】

【状況的に、見て、解らない所は？】

納得した所で、事前ミーティングの始まり。これ位は、“ずる”とは見られない。

“時は金なり”。“善は急げ”。

【状況説明より、地図が要るわね。】

【ランゲルハンス島の？】

【誰のよ。面白い事言わないで。あたし達が、“何”^{マター}をやらなければいけないのかは、解ってるでしょう？】

少し考えた末に、＜Y E S＞のピンクの文字が、脳裏に映る。“

聲”じゃなく、文章とか、ギリギリ切り詰めて、単語が一個とか二個とか送られて来るのは、ラエラの反省した証。R I G H T。良い子ね。

だが、流石、ラエラ。こう言った。

【もう、此処まで、無茶苦茶だと、いつそ、お脳の中身どころか、

内臓の中身も見たくなつて。」

此処で、第一斑と呼ばれる彼らの為に弁護すると。

凡そ、彼らは、警察や自警団に連絡するなどして、打てる手はみんな打っている。元義勇兵の、結構、麓の“街”では、『顔』の人間に、予め顔を繋いでおいて、こういう場合に、協力を求める、とかね。最後の手段は、人件費その他の問題から言つて、『無料』では、流石に無いけれど。

通報が遅れたとか、言っているがしかし、騒ぎになつたのは、夜の夜中であつて、その五時間後には、こうして、あたし達二人が、“司令官室”に続く廊下を歩いているのだ。

それでも、初めから、“最悪”の事態に備えるべく準備をしなかつた、と言う点で、ジーニアス（天才）・クラスの知能指数の持ち主ラエラには、そこが、耐えられない無能に映つたらしい。お気の毒。

【あたしは、見たくない。】

あたしは、言った。いや、本気で。真剣に。

【何が悲しくて、そんな物を見なくてはならないのよ。臍臓の内部構造なんて。】

【で。地図^{マップ}つて？】

けろり。一瞬。固まる。この、あたしですら。

完全にラエラが、機嫌を既に取り戻しているのが解るからだ。

いつも思うのだけれど、その上、あたしだけが、こう思っているのでは無い事はもう、はつきりしているのだけれども、どの辺にこの子の感情周辺のシフト機能は付いているのじゃ。あっさり、仕事の中身の話に転換しているし。

【解っているでしょう？街の地図。】

まあ、あたしも、長い付き合いで、慣れてはいるのだけれど。

【市街地^{シティ}？旧市街地^{ダウン}？】

【両方。】

【両方？了解。】

通常、比較的治安と行政の整った街、官庁を多く抱えたビルディングの立ち並ぶブロックの有る街、“市街地”は、“シティ”とも、“アップ・タウン”とも、呼ばれる。それに対して、これも、あくまでも比較的、治安と行政と交通機関その他の不便な、劣っているとされる街は、不名誉な事に、“スラム”或いは、“ダウン”と呼ばれる事に決まってしまった。

それにしても、年配の人達に言う“アップ・タウン”と言う言葉に対する、『あの』リアクションしたら。一再ならず、驚いた事がある。よっぽどの、コンプレックスなのかしらね。或る年齢から上は、職種性別住んでいる地域を問わない気がするんだけれど。確かに、あたし達は、『あの』“大異変”の後の世代ですけれど。

つまり。

何が言いたいのかと言うと。両方、揃うと“アップ・ダウン”になるのだ。“シティ”と紛らわしくて、余り、使う名称じゃないけれど。憶えておいても、良いかも。

【“司令官”に用意して貰うつたら。何も、あんたが、装備班に回らなくても良いでしょう？】

【ふんふん。寂しいんだー いや、そうじゃなくて、“マシン”に入れておこうと思って、アップデート・ヴァージョン。どんどん変わっているから。】

何気に、おいしい料理の店の情報なんか（画像入りで）ちらつかせる彼女を見ていると、彼女が、多分、凹み気味だなんて、信じられなくなってきた。普通は。

と、此処まで、あくまでも、あたし達は、“無言”で歩いて来た。そして、此処、廊下にも、天井にも、壁にも、オレンジ色の仕切り線が区切っている場所に来た。仕切り線の外見は、そう、合成樹脂のケーブル・ダクトに良く似ている。機能は、それどころじゃないけれど。

此処から先は、トップ・シークレットである。我等が“基地”最高の。

あたし達は、あえて、オレンジ色の、ラインを踏む。ほぼ、同時に、口を開く。

でないと、即刻、凄い“聲”の、誰何が飛んで来るからだ。
デクラレーション
申告。

「エルドリスⅡエルゼリⅡグレースン。」

「ラファエラⅡイーディスⅡヤーネフェルト。」

壁や天井の中に備え付けのセンサーから、中央司令部の中核コンピュータに、あたし達のバイオメトリクスⅡデータがすぐさま、照会に回される。

ああ、ほぼ、二十分ぶりに聞く、自分の肉声、何て素晴らしく、甘やかなの。

傍らで、何か、わざとらしく、あたしの内面についてももう少し、考察がなっていない人間が、溜息を、付いたようだった。

オレンジ色のラインが、前触れもなく、二人の見守る前で、白くなった。いや、解っていた事だけれど、今が、初めてじゃないけれど。これについて、あたしに、説明を求めるのは、やめて欲しい。

あたしとしては、どんな金属、高分子系、カーボン・マテリアルと言った、工業用素材も、変容するし、一定の刺激に対して反応するようになっているし、また、不可逆反応は常に、研究者の研究対象である、なんて事を、口の中で、ごもごも言うだけだ。

マイクロ・マシン？うん、そう言うものかな。色彩の変容チップが、ライン内に多く仕掛けられているらしいのだ。何のことって、信号機を、有機的反応素材で作るって話は知っているわよね？

ところで、これも極く当たり前ながら、朝靄の高原を思わせる、種々の“聲”はもう、この場所まで来ると、静まり返っている。まさに静寂の森。

ともかく。あたし達二人は、ルウとラファエラは、通って良いのだ。

「承認。」

こういう場合の、非常に特殊な、少し“耳”を澄ませた位では、男女の別も判断しがたい“聲”が届く。どの位、特別って、とにかく、機械には未だ、この時代にあっても、“聲”は出せないのだ。彼ら一流の事情により。

勿論。フロム・オペレーター。この為の、特別な訓練を受けている。

だが、あたし達は、いつもながら。この瞬間が、何故だか一番怖い。

アイ・イン・ザ・スカイ。大空の巨大な目が、瞬いたような気がするくらいだ。彼らは常に我等を見ている。

良い時も。悪い時も。

誰かが自分をじつと見ているような時に、自分の意に沿わぬことを、或いは、自分が幼い時から受けて来た教育に背く様な行動をする人間。

それは、どんな人間だろうか？

正直、そんな人間には、あまり、会いたくない。頼まれても。

意外な事に、ラファエラが、考えに沈む、あたしに、声を掛けた。
「着いたわよ。」

「ええ。」

あたしは、さほど、顎を動かさないで肯いた。と、同時に、これも二人同時に、立ち止まる。其処は、長い廊下の突き当たり。

目の前に、シンプルな、木製のグレーの扉が有った。

扉の上に、金色の名札が小さく掲げられている。金色のレリーフで作られた文字が見える。

Commander's Room

/ to be continued . . .

〔義務と判断〕 〈Duty and Judgment〉

その扉の前で。

実際は五秒と無かつたろう、ほんの短い時間。あたしは、此処に来る前、朝の、身支度を整える為（乙女のたしなみ）、洗面所に立った時の事を思い出していた。

後で聞いたら、ラエラは何故か、生まれて初めて入った（連れて行って貰った？）ファスト・フードの店や其処の店員の制服の色とかデザインとか、香ばしい小さめのバンズから、パテと一緒にピクルスがはみ出していた事とかを思い出していたらしい。

四角くシンプルで、飾り気の無い鏡に映ったあたしは、いつものあたしだった。

頭の周りでぐるぐると渦巻く、ナチュラルカールのヘアは、首筋を通り越して、毛先は背中に届いている。ヘアバンドも何も頭に付けないと、其処までは長い。黒髪に少しずつ混じった金色メッシュは天然の、自前のもの。いやに成る程濃く蒼い瞳は、丸く見開かれて、自分を見返している。

不本意ながら、中肉中背。バランスは取れている方だと思う。何たって、ラエラの178cmに対して、あたしの身長は、169cm。10?近く違う。下手をすれば、頭半分って言う所。彼女がのっぽなの。

【ざけんな、この。顔洗え。】

おお、こわや。耐えられないわね。この、凶暴さ。

（ルウ。今日も、頑張るのよ。）

とにかく、頭を覚まさない。それも早めに。

あたしは、そもそも、サプリメントと言う奴は好きになれない（多分、義勇軍だって食べない）。まだ、ミルクとバナナの方がましと言っものだ。で、冷蔵庫を開けて、その二つで簡単な朝食とした。
「あ。・・・ラッキー。」

思わず、声を上げて、感謝。

ヨーグルトが残っている、て、ことは、何？ラエラが昨夜、何かだべりながら、あたしの冷蔵庫に関わらず、出して食べていたのは、『飽きた』とか言っていたミルク・プリンの方だった、って、事？
…今となつては、どうでも良い事なのかも知れないけれど。

ミルクは、新鮮で美味しかった。

うーん。ダイエット・メニューとしては、OKかも知れないけれど、任務の真つ最中にお腹が鳴ったら、何としよう。

これから会う、“司令官”の人間性に期待するとしよう。

お世辞にも、楽しい朝食の席になるだろうなどとは予測を出しかねるが。

あたしは、皮製で幅広のヘアバンドをクロークから出して、額の上から首の後ろにいたる部分をくるりと纏めた。よし、身が引き締まる。

“行動する人間として思考し、思考する人間として、行動せよ。”か。

【アンリィベルクスン？…どうしたのよ？】

「あんたが、読めつて言つたんじゃなかったっけ？」

あたしは、忘れ物は無いか確かめながら、言い返した。それと。

一旦、自分の部屋を見回す。これは儀式だ。だが、必ずまた、この部屋に、あたしは帰って来る。

さて。あたしは、自分の部屋のドアを開けた。出て行った後、鍵を掛けて封印する為に。

《大異変》の後、世界で雪崩現象的に、人間が減った（じゃあ、大事にすれば良いのに）。その一方で、人口比に対して、一時的にせよ、増えた人種（職種か？）が幾つか存在する（この辺は歴史の授業でも習った。）。

その内の一つが、自警団であり（これは何故か解るよね。武器を持った事の無い人間でも、持たなければ行けなくなるような事態が

頻発したのだ。彼らは主に、街や村の境界線で活動し、活躍した。）
、もう一つが、もともと在った各国軍隊の生き残り達が寄り集まって組織し発展した、現在もそれぞれの地域名を冠した軍隊に所属する義勇兵或いは、職業軍人である。

“司令官”は、後者の出身であると言う。どのような数奇な運命（或いは事情）が、あの人を、この基地のほぼ唯一に近い、責任者としたのか返は、あたしは、詳しくは、知らない。

義勇兵、或いは義勇兵で構成された義勇軍だが、これは、各地でほぼ、平行的に編成された事になる。

簡単に言つと（時間も無い事だし）、自警団が自分の本来所属する街や村以外の所に行つて活動すると、“義勇兵”と呼ばれ、時間の経つにつれて、暴徒や集団略奪の爆発的に増加するにつれ、それに対抗する為に、各地の義勇軍同士は連合し、やがて、当然の成り行きながら、正規の軍隊（上記の通り）と、連絡を取り合うようになる。今では、正規軍と義勇軍の両方に所属している人間は稀だが、一時は相当数に上つたらしい。

とにかく、ノックだ。あたしは、右手を胸の辺りに持つて行つた。軽く、二回、叩く。

雨の日に聞いたら、さぞかし、さつぱりするだろう、渴いた音が、これも、二回、響く。

「どうぞ。」

ラエラは、いつもながら、『入りたまえ。』と言われたと主張し、あたしは、『どうぞ（プリーズ）』としか、聞こえなかったと反論する、他のメンバーは、『開いている。』と言われたとして、論争に加わる、あの、有名な肉声が響く。

細やかな手が、ドアを開け（あたし達は、扉に触る必要すら、無い。）、何歩か、これも、まるで、小学校の校長室のような、木製の正方形のパネルを組み合わせたはめ込み床を歩く事によって、あたしたちは、“司令官”に相見える事になる。

闘牛場の牛の如く？文化祭前の学生のようにだ。

（決して、悪い事は致しません。学校に迷惑もかけません。だから先生、或る程度の自由は、認めて下さるでしょう？）

ドアを開けてくれたのは、勿論、“司令官秘書”だった。ミス・チェンバースは、きっちり纏められた銀髪を、ちよつと後にはねのける様にすると、また、“司令官”の傍らに据え付けられた、自分専用のデスクへと戻って行つた。あたしは、ちよつと、彼女が好きなので、肩を少し上げて見せて、挨拶代わりとする。それがつつじたのかどうか。彼女は、コンピューター端末のキーボードに走らせる指を、特に休めようとしめない。いや。一瞬だけ、それも、彼女のボスの命令で、顔を上げる。

「ベレニス。二人に、座る場所を、椅子を用意してくれないか。」
「はい。」

椅子？

ほぼ、音も無く、床から、二人分のソファが起き上がつて来た。
“司令官”から、自然な動作でそれを勧められるまでも無く、これは、と、思う。

【話が長くなるらしいよ。ルウ。朝食は、食堂の仕出しだね。ミス・ベレニス〓チェンバースの手作りじゃなくて。】

黙れ、ラエラ。ソファは、良くクッションが効いている。

『ないか。』が無ければ、軍人の命令口調。などと、自らの置かれた状況を揶揄している場合じゃない。あたし達は、“司令官”に對面していた。

彼は、特に特別な事をしている訳では無かった。硝子の花瓶に形良く瑞々しく生けられたバラやガーベラなどの花々は、彼が日常の仕事をこなしている真つ最中である、象徴のような物だ。生けたのはやはり、ミス・チェンバースかな。そうだろうな。

仕立ての良い厚手のスーツを着て、綺麗に撫で付けられた半白の髪を七三にした彼は、誰が言うまでも無く、外見だけなら街の小学校の校長先生が、一番ぴつたりと合っているだろう。…詳述したい所だが、あたしは、第一印象と言う奴を、決して馬鹿にして言つて

いる訳じゃない。

時には、それが、相手の内面や本質をずばり、言い当てている場合だつて有る、と、言いたい位だ。

何なら、現在過去未来を、其処に言い足しても良い。

そう。につこり笑つて誉めて貰えれば、どんなに嬉しいだろうと、生徒も両親も思つような校長先生。誉めてもらえる材料なら、沢山有りそんなものだ。テストの点数。工作の出来。スポーツの試合の応援だつて良い。

窓を、野球のボールに割られたつて、叱るのは、あくまでも、ボールを取りに来た本人達の為であり、体罰に対しては、眉を顰める、そんな、普通の人生だつて、彼には、有り得たのかも知れないのだ。…当面の問題には、何の関係も無いが。

「お早う。」

柔らかな口調で、“司令官”が口を開いた。良く響く声が、部屋一杯に拡がつて行つて、最後にあたし達の耳に届く。大木の葉ずれ、深山のせせらぎが、固い岩の傍らを、丁度行き過ぎる瞬間に立てる物音。

彼の声を形容すれば、そんな所か。

机の上で、両手を組んだままの姿勢を変えずに、あたし達二人を、少しばかり観察している様子。モノクルが、朝の光に煌めいた。両目以上に『物を見る』と、既に義勇軍時代に評された、失われて久しい、右目を覆う義眼の代わりも務める、白銀のモノクルが。

僅かながら、髪と同色のまばらな髭の下に微笑を浮かべている。

或いは、思つたより早く、我々が到着したので、機嫌が良いのかもしれない。我等が“閣下”には。

「朝食は済んだのかね？二人とも？」

「簡単に。」

と、あたし。

「未だです。」

と、ラエラ。

一瞬、あたしは、視線を窓枠の傍で微風に翻るカーテンの方向に泳がせた。まったくもう、料理は、下手をすると、あたしと同じ位、上手な癖に。

【いや、それって、『料理』と言うものの、概念の方向性からして間違っているから。“基地”内でランキングを作るとかって。】

何だか、困ったような、ラエラの聲。

それは、良いから。話に入りましょう。所で、オムレツにかけるソースは、ベシヤメルより、トマトが良いな。

「考慮しよう。」

手元のミニ端末（勿論高性能）に、オーダーを打ち込んでいる様子に、あたしは内心、小躍りした。

うわぁお。予算節約。その上、手作り。止めは、会食よ、ご会食。【2、3の点から、それ、変。】

よつぽど、暇なのか、現時点で任務について考えるのは、もつぱら、あたしに任せているのか、ラエラのどうでも良さそうな指摘が遣って来る。^{つつこみ}

【まず、明らかに“朝食代”も予算内。あと、街の食堂に、オート・シェフを期待しない方が良い。：やっぱり、個人差だから。手作りの方が安価だ（やすい）し。市民は宇宙飛行士じゃないし。これを会食と認めたら、“ボス”は一日何回食事をしているか、知れたものじゃないと思う。】

ところで、“オート・シェフ”が、ロボットの料理人あるいは、ボタンを押したら、温かな料理が出て来る機械（！）の事だと思っている人、いるのかな、まだ？ただの、ワン・プレート・ミールの事だから。高分子系のディッシュ・プレートの上に、ラップがしてあって、レンジで温めて食べる奴。味？悪くは無いんだけど、栄養バランスも考え抜かれているんだけど、うーむ、正式な晚餐には、ちよつと、向かないメニューだと思う。

【あんたは、あたしに、突っ込みの採点でもして欲しいわけ？】

【あら、いつ批評家になったのよ。あたしの沈着にして、芸術的な

までの、知性的感受性を。」

訳の解らん。何処のポケットに仕舞っておいたのよ、そんなもの。知性的感受性？

て言うか、有った所に返してらっしゃい。

【どう言う意味よ、それは、ルウ？】

【あんた、子供の頃から、ポケットが沢山ある服が好きだったから、】

【それこそ…。】

「待ちたまえ、二人とも。」

“無言で”一触即発の危機を迎える所だったあたし達に、実に良いタイミングで、ボスの仲裁が入った。

冷水を、バケツに一発ずつ、浴びせかけられたように、あたし達は、はたと、我に帰った。氣まずそうに、お互いを見遣る。時間を無駄にする所だった。

ボスが“エース”クラスの“耳”を持っていなかったらと思うと、ぞつとする。

【“司令官”でしょ、ルウ。】

そう、“司令官。”閣下に敬礼。二人同時に。

「失礼しました。」

と、あたし。

「申し訳有りません。」

と、ラエラ。

“良い子”になろうと、何度目かの決意をする。立ち上がって、我々の傍にまで来ていた彼は、敬礼と同時に、机を回って、再び、着席する。

「良かろう。朝食を食べながらと思ったが、任務の説明に入ろう。」

当然、予測されてしかるべき事だったが、それでも、言われた瞬間、背筋が凍り付いたように固まったのが解った。少し、身体がもぞもぞと動くのを憶える。

“ 任務の説明 ”。

これを聞く事が即ち、“ 基地 ” のメンバーズへの任務そのものの投下なのだ。

聞けば、つまり、後戻りは出来ない。聞いた事によって、自動的に、任務そのものに、組み込まれる事になる。

イエスカノーかを、自然に答える事に、なっている訳だ。
で、あたし達がどうしたかと言うと、肯いた。

「はい。」

と、あたし。

「どうぞ。」

と、ラエラ。

他に、どうしろと？

刹那、室内に、目に見えなければ、耳にも聞こえない溜息のようなものが、何種類かの密度を持って、漂い、頭上換気ダクトに吸い込まれるようにして消えた、ように思った、多分、気のせいだろうと思う。

これは、任務なのだ。食わせて貰って、着せて貰って、寝かせて貰って、此処まで育てられて（高い）教育も授けられて、その上、宗教の自由まで許して貰って（今の世の中で出来得る限りの）、その上、何を望めと？

とうに、答えは出ている。

あたしは、ルウだ。エルドリスだ。

隣りで、黙って（これが珍しい位に静かに）肯いた人間がいる。

ラエラだ。小憎らしい程に、落ち着き払って姿勢良くソファに腰掛けながら。

あたしは、こいつが死んだら、或いは、何かの理由で遠くに去った場合、その日の内に、楽器を全て叩き壊すかも知れない。

上記の仮定項目だが、有り難い事に病気や怪我以外を思いつかない。…ここまで読めば解るだろうけれど、“ 基地 ” 内には最高の医

療が約束された病院がある。建物そのものは、国内最高の規模大き
さとは言わないが。

ミス・チェンバースの、忙しく働いていた指の動きがぴたり、と
止まって、室内に、キーボードの音が絶えた。静寂が訪れる。

それが、合図になったかのように、“司令官”が口を開いた。

「市街地^{シティ}」に於いて、行方不明になった人間がいる。探し出して
欲しい。」

別に、殊更呼吸を合わせた訳ではない。ただ、時々、こう言う事
が起きる。

あたし達は、同時に、動いた。立ち上がり、最敬礼したのだ。一
糸乱れぬ動きで（うぬぼれでは無いと、思いたい。）。

「了解^{ラジャー}」
と。

/ t o b e c o n t i n u e

d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1903m/>

メアリー＝ポピンズは、何処にいる

2010年10月10日02時33分発行